名和 晃平　Kohei NAWA
1975年生まれ。大阪府出身。1998年、Royal College of Art （英国王立美術院）交換留学。2003年、京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期) 課程彫刻専攻修了。影刻の「表皮」への意識から発し、感覚や思考のメタファーとしてのマテリアルを 「 セル(細胞・粒) という独自の概念を軸に様々な表現へと展開する。2009年より自身が主常する京都・伏見のクリエイティブプラットフォーム「Sandwich」を拠点に活助。京都芸術大学教授。近年の主な展覧会に、2024年「Soma」Galerie Vera Munro（ハンブルク）、「Aether」Pace Gallery（ニューヨーク）などがある。

神馬 啓佑　Keisuke JIMBA
1985年愛知県生まれ、兵庫県育ち。2011年に京都造形芸術大学大学院芸術研究科表現専攻を修了。現在は京都を拠点に、絵画を中心としたインスタレーション作品を制作している。近年の主な展覧会に、「ワニのためのフーガ：MIKADO2」（京都市京セラ美術館、2024年）、「じゃがいもがポテトになる時」（VOU、京都、2022年）、「THE ヨエロ寸 -尋-」（VOU、京都、2021年）、「当然の結末＃6（共同住宅、個人的体験）」（LEESAYA、東京、2019年）、「当然の結末＃2（鑑賞と干渉、言語能力、円周軌道）」（gallery PARC、京都、2018年）、「なまの記号たち -ポートレイトの現在形-」（シャトー小金井、東京、2017年）、「VOCA展2016」（上野の森美術館、東京、2016年）などがある。

赤松 加奈　Kana AKAMATSU
1990年、奈良県生まれ。奈良県在住。2015年、京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻ペインティング領域修了。生と死や自然と人工など相反するものがバランスをとりながら作り上げる景色を多角的に捉え描く。現在は1歳の娘との密接な生活を送りながら、異なる視点でひとつの景色を見つめるという新たな体験を制作に反映させている。生活環境の変化とともに、作品も緩やかに変化を続けている。近年の主な展覧会に、奈良県立美術館ギャラリーでの個展「奈良ゆかりの現代作家展 02 赤松加奈『こんにちは、　　』」（2025）、国立新美術館での「Idemitsu Art Award アーティスト・セレクション 2024」などがある。

長田 綾美　Ayami NAGATA
1997年大阪生まれ。2020年に京都芸術大学美術工芸学科染織テキスタイルコースを卒業、2022年に同大学大学院修士課程染織テキスタイル分野を修了。現在は大阪を拠点に活動。「日常をリフレームする」をテーマに、ブルーシートや輪ゴム、不織布、水糸などの工業製品を素材に用い、物事の価値の再考を促す作品を制作している。単純な染織技法の執拗な反復と、そこから生じる身体感覚の連動にも関心を寄せる。近年の主な展覧会に、「群馬青年ビエンナーレ2025」（群馬県立近代美術館）、「Kyoto Art for Tomorrow 2023」（京都文化博物館）、「VOCA展2021」（上野の森美術館）などがある。

津波 博美　Hiromi TSUHA
南城市出身。1996年に渡英し、2019年までロンドンに在住。イギリスでは写真を学んだ後、2007年にロンドン芸術大学キャンバウェル校プリントメイキング科で修士号を取得。建築素材を用いた大学でのプロジェクトをきっかけに、インスタレーションに関心を持つようになる。2008年、沖縄で開催された国際交流展「Wanakio」に参加し、廃屋を活用したサイトスペシフィックな作品を発表。その後はヨーロッパやアジアでの滞在制作や展覧会の企画も手がけるなど、「移動」や「場所性」をテーマとした作品を多く発表している。

山内 盛彰　Moriaki YAMAUCHI
1968年、沖縄出身の両親のもとブラジルに生まれ、1971年に沖縄へ移住。沖縄キリスト教短期大学（現・沖縄キリスト教学院大学）保育科卒業後、1990年に渡英。Cavendish Collegeでファッションデザインを学び、スタイリストやデザイナーとして活動。2004年よりWorking Men’s Collegeで陶芸を学び、英国人陶芸家レスリー・マクシェイの助手として釉薬技法などを習得。2013年からはHarrow Collegeにて陶芸講師・技術者として勤務している。

喜屋武 千恵　Chie KYAN
沖縄県生まれ。1995年、沖縄県立芸術大学大学院日本画専攻修了。2001年には琉球絵画の研究のため、沖縄県人材育成財団の国外派遣研究員として中国・魯迅美術学院に留学。2015年より「琉球王国文化遺産集積・再興事業」において絵画の復元研究に携わる。現在、沖縄県立芸術大学の非常勤講師・共同研究員としても活動。沖縄を拠点に、母性・祈り・鎮魂を主題とし、琉球の伝統的な精神文化を反映した創作を続けている。近年は個展「RESONATE ー共鳴ー」をはじめ、沖縄・東京・台湾・サラエボなど、国内外の展覧会に多数参加。「目には映らない大切なもの、言葉にできない大切なことを受け取り、育み、放つ」ことを制作の根幹に据えている。

能勢 裕子　Yuko NOSE
神奈川県横浜市生まれ、1980 年より沖縄在住。彫刻家として多摩美術大学大学院在学中より現在に至るまで、多数のグループ展、公募展、個展に出品している。沖縄にて、その自然環境（特に植物の生態）に触発され、創作への影響を受ける。作品の素材は、木材からミクストメディアに移行し、住建材を素材にした自在性を重視している。インスタレーション作品が多く、空間を意識した設置作品が多い。場に対する意識は公共での作品制作にも現れている。

能勢 孝二郎　Kojiro NOSE
1950年沖縄生まれ。多摩美術大学大学院彫刻科修士課程在学中を含め、10年以上東京で石彫を中心に制作。沖縄に帰省後、風景におけるコンクリートブロックの存在感に着目し、素材として用いるようになる。建築とのコラボレーションも多く、H鋼や単管なども活用し、多数の作品を発表。1994年に南城市文化センター・シュガーホールのレリーフを制作し、2007年には沖縄県立博物館・美術館に屋外彫刻を設置。2021年には3会場で個展を開催し、コンクリートブロックを中心とした作品集『BLOCKHEAD』を出版。2023〜24年には大阪と群馬のコンクリート製品メーカーで創作活動を行った。

石田尚志　Takashi ISHIDA
東京都生まれ。線を一コマずつ描いて撮影する「ドローイング・アニメーション」の手法により、増殖する線や移動する点を介して空間に運動性を介入させ、空間の質を変容させるインスタレーションを展開する。主な展覧会に「絵と窓の間」（神奈川県立近代美術館葉山、2024年／アーツ前橋、2025年）、「弧上の光」（国際芸術センター青森、2019年）、シャルジャ・ビエンナーレ13（2017年）、あいちトリエンナーレ（2016年）、「渦まく光」（横浜美術館／沖縄県立博物館・美術館、2015年）などがある。2025年第75回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。多摩美術大学教授。

O JUN
東京都生まれ。主に油彩、水彩、クレヨンなど多様な画材で制作し、時にパフォーマンスを通して身体と描く行為の関係性を探求している。主な展覧会に「近作展27 OJUN」（2002年、国立国際美術館・大阪）、「絵画の庭ー0年代日本の地平から」（2009年・大阪）、「描く児」（2013年、府中市美術館・東京）、「まんまんちゃん、あん」（2016年、国際芸術センター青森）、「途中の造物」（2019年、ミヅマアートギャラリー・東京）、「六本木クロッシング2022」（森美術館・東京）などがある。

范鐘鳴　Zhongming FAN
1958年中国・上海生まれ。上海師範大学卒業。現代美術作家として、上海を拠点に国内外で精力的に活動。絵画やインスタレーションを中心に、東洋的な思想と現代性を融合させた表現で注目を集めている。近年の主な展覧会に「東京Untitled上海」（2025年、アートコンプレックスセンター東京）、「中医正青春」（2025年、明園美術館／上海）、「西岸芸術とデザイン博覧会」（2024年、行空間／上海）、「東極の磁場 in WAKASA」（2023・2024年、熊川宿若狭美術館／福井）などがある。